續後撰和歌集　下

九曜文庫

續後撰和歌集巻第十一

戀哥一

題しらす　　読人不知

おもふなるめのことをもいはすしてふかきうらみのいひしらぬ身を
いもせ川みなかくれたる玉藻のみみたれてもはいふなるかな

人麿

磯のうへに生ふる芦の名をおしみ人にしらせて恋つゝそふる

伊勢

潤まそらさてなるゝ島のねまてゝ人にみえぬねかな

よみ人しらす

夏の野の草下にかくれ行水の後をしも我とこそしれ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

人しれす下になかるゝ涙川せきとゝめなん影やみゆると

女につかはしける　　權中納言定頼

奥山の岩まの瀧つまれゝともふかくや人をおもひてやまん

堀川院御時艶書の哥を人々にめして女房のもとにつかはして返事をめしける時に

侍ける　　大納言忠教

人しれぬ恋路によるとふく波のかよりそさらぬたまもかな

返し　　禎子内親王家摂津

忘れすよ始るもふみしと思ふ月よ何かは涙なるらん

なかし　数書に　権中納言公国

なき世まての末にハ袖ハ朽果てとさらぬ方もなきそ悲しき

恋歌中に　左京大夫顕輔

いかにせん玉江の芦の下ねのみよそにかけても知人なき

俊恵法師

我恋ハ今志らぬまにおもひそめぬなかハ白遠やともみえまほして

徳大寺右大臣

わか恋ハ吉野山おひのしたり衣人も志らねは乱てそふ

式子内親王

志るしやハ人のつらさ草のそのゝきまゝによそひおけとも

いかにせん岸うつ波のかけてたに志られぬ恋に身をくだきつゝ

正三位知家

志るやとて枕にせぬよひとつのみなれおりよりも露そこほる

寄草恋といふことを

雅成親王

ぬかさ江の芦まに生る白菅の志らすすいて世のうらみかれん

百首歌よみ侍りける時忍恋

殷富門院大輔

難波女のこやにをりたく志ほれ芦の思ひハ下にもえつゝそ之へ

たかしらて　　鎌倉右大臣

くもゐの下にふ芦のみこもりえし我ぞ雁も来し頃
ゐ(?)ながしの庭へふきこしてまつかりけむ
ひとりんくかささへ給けり

源重之

芦の屋はこやのしのやは思ひとも今はしのびまね(?)かずとみを
思ふ心を

後京極摂政前太政大臣

玉瀬川かひく玉藻の下乱れこひやみかくれてのみ

家六百番歌合に

しほ風の吹こすあまの苫ひさし下にしほのくゆる時雨(?)

建保三年内大臣家の百首歌に名所恋

前中納言定家

我袖によせくる波はいつ(?)も袖て知りしてぬとはせ

左京大夫顕輔家歌合に

清輔朝臣

伊勢の海やあまの焼火のけむりとも見る人(?)山へ(?)すぎ(?)けむ

恋歌の中に　　前大納言基良

いくつにあまのいさり火くらふらむしたにこがるる袖をかへるも

九月十三夜十首歌合に寄煙恋

鷹司院帥

難波江の芦のやれ下むすほゝれてや煩ひわたるらん

百首歌めしけるついてに

後鳥羽院御製

思ひのつもりはあまのかるもにあえねはそてもくちはてゝ

恋の心を

権中納言宗家

つれなさを人の心にならはさは忘れそせましうらみはてゝ

洞院摂政家百首歌に忍恋

従二位行能

住吉のあさみ浦のこゝろとはしらてその下にくちや果なん

忍恋を

寂縁法師

さてのみそふかきのとれは山はふに時雨ていろそ出まし

土御門院小宰相

忍ふとも忍ふとも志し山城のときは森の色しみえなは

入道前摂政左大臣

夜経てわか身にふれは思ふ山人のたくとさへこそ

皇太后宮大夫俊成女

いかにせん思ひの山に夜絶てもえひつゝとも霧はれなさを

式子内親王

宮ゆへといふ花は雨にて消果んよそれそのすゑもみん

九月十三夜十首歌合に寄煙忍恋

前太政大臣

煙為にそれとはみえしおもひあらはさらんまことすら下もえのおもひは

左近大将定雅

恋侘て消なん後の煙にそおもひありきと人にしらすな

弁内侍

あらはさらくなと下もえと成にけん海人の煙も空にこそたて

百首哥奉りし時寄煙恋

源俊平

徒に立なんそ行さき下もえの思ひの煙さてと消なて

思恋を

参議為氏

しら迎ふみにひとつにむなしき煙とはいさゆるおもひありけむ

寄雲恋

皇太后宮大夫俊成女

しられしな夕の雲をそれとたにいはてそ思ひの下に消なは

人々に十首哥めされし次に

太上天皇

思ふそよなにはのつてきさるともえ絶もなく涙なれ

十首哥合に思久恋

土御門院小宰相

人しれぬおもひにふかき袖の月の命とたのまぬ程そ身まされ

少将内侍

たのまれしんを

なきふるゝ神ハ昔ニ於果ぬるといふことよ渡りするに

恋の中に　寂蓮法師

神よのこゝろむかひとのこゝろよ人めをとりて渡るなり

蓮生法師

渡ても於出へもとてこゝろのつまりあるゝかり落の涙をそ

実業恋　祝部成茂

志らせや尾花かりよの草むらにおきかさ露ゆ情ぬらさここと

聞しらす　俊頼朝臣

若ふきみつけ草乃下露や志らぬ恋の涙なるらん

基俊

桜麻の於ふ乃下草志てこゝろのこる[illegible]ハ神そ露をゆく

後法性寺入道前関白家百首歌よみ侍

けるに忍恋　皇太后宮大夫俊成

人しれぬ神そ露ハ落とのみ涙も洞の色といふらん

刑部卿頼輔家歌合に同しこゝろを

前参議教長

涙川人め流みよせまさ流ハ君よりしつるか

恋歌中に　式子内親王

君ゆゑに忍ふハ袖と流してめもしらしよ涙もかれぬとそ

百首歌めしける時つかうまつりける忍恋

太上天皇

あさみどりやまの神よ藤まさるおもひしを
関大臣よめる時家に百首よみ侍
けるに
入道前摂政太政大臣
まてあまた忍しふみそのしら川のふみたる清滝の
無名なそ
枕にふ神よそこの浪つきぬはゆくかりなけれなかり
従三位頼綱女
悲しらす
よみ人しらす
うらみそ ぬるさあかき玉の緒よみ乱れてたえぬ人の忍く
母よつらし哥
九条右大臣

あさ川なにのとそさ浪まとむなる人の影をとて
あめひて人よつかしける
よみ人しらす
今はとてひとひ結びて山川の岩ま流るゝとりしつれ
なし
祐子内親王家紀伊
ひとりこふや岩ま流るゝとりしてもとむさらの世をは
無名中に
如願法師
あさりきあひしに三輪河ながれて人をとひぬれは
葉平都にりくらり君にふるとひそりける
世のすに
よみ人しらす

こゝろにはふかきといひてそれを舟にのせて棹さしてこそゆき
をしらす

よるの海ゆたにひろき庭の浪はうはゝなかれを何にたとへん
わたのそこにさてしつむへきとおもふこゝろのふかさそしるよ

皇太后宮大夫俊成

おふみのうみこくへきかたも知らぬかなかくれぬ浪のさわくせとや

殷富門院大輔

みまはかるせの淀のまこも草をいかにかくもありかねつゝ袖

入道前摂政家恋十首乃哥合に寄枕恋

源家長朝臣

ことまくらかる瀬の淀にはさそはれてや恋ちにこかれつゝき

寄舟恋といふことを

権大僧都有果

梶まくらみなとにかゝる小舟いかなる風にまかせさめん

恋の中に

権中納言俊忠

なにはの海やこき出る舟のあとをもなきにのみ人に忘られぬ

藤原道経

かたしまの浦わの波のよるかたもなきにそ人の恋をやはする

待賢門院堀川

友こふるかつらのまゆすゝみかはらむ行へさへしらさき

和泉式部

くこひハ旅と志ぬもよそにみし人のかの命なれ
しる人志らす

中将よ帳やとの前に見もせぬ人の中へよ忘やりける
七条乃きさいの宮のむすめにふつゝかき

平定文

百敷のおほまへ(より)の袖ハ絶えてとはゝかくともしらて忘られき
女につかはしける

業平朝臣

涙そねる世にしもあるらし世の人のつらさに袖のしつく
忘るゝ身の中に

式子内親王

いかにせん忘れてしるへきものをかくとしらはゝ人の命なりけり

堀川院艶書の哥

大納言忠教

ほとさまハ恋ひさえたえなんとしつるかなひとの涙なりけり

返し

京極前関白家肥後

うきひとのおもひの小舟の綱手縄なかなか中にもくるしかるへき

續後撰和歌集巻第十二

戀哥二

題しらす　柿本人麿

かくのみ恋や渡らん玉きはる命もしらす年はへにけり

貫之

ねきみつる涙を袖にためやとて玉をつゝみておもひあはせは
身のうけりたとこえまちけるほしこそ

中たえぬるに　和泉式部

あふとみしはかりやよはの夢をたにみても果てゝ後の玉の緒はいかに

恋哥中に　伊勢

恋しさにしぬるものとはきかねとも世のためしにはなりぬへきかな

権中納言定家

難面をなをしもしたふ白露の消かゝるにも命をしさに

右大臣に侍りける時家に百首哥よませ侍りけるに
忍恋　後法性寺入道前関白太政大臣

思ふにはたえぬ命をいかにせんあふまてとこそ命をしけれ

郁芳門院哥合に　修理大夫顕季

ほかのことはふかりや我恋の命をたのむたのみなからん

俊恵法師　哥合に

道因法師

恋しなは後の世とはいはすともされはおそれはそれもこそ契れ
思しらす

正三位知家

こひしなん身をやはをしむはかなくて命の程そつらきか

侍従伊成

はてとりてしなはや命のつれなさやはてはききてもかなしき

源孝行

身のうきをおもふとほりて命こそなからへは世にまてもなき

寂延法師

はかなしともたのめし身のうきは玉の緒命ともしらて猶待けん

平重時朝臣

あふ事はかゝるのゝ心ならひに浪とうけてよるそかなしき

久恋　土御門院小宰相

年をへてつらさのかきりをもみてそよはる玉の緒もかな

源家長朝臣

こゝろのおもひさんとをともよも雖ら人とまたれて

恋哥中に　皇太后宮大夫俊成

うきゝ侘ぬ今は頼まし後の世も同しつらさなりとも

十首哥たてまつりし時恋の心を

大納言隆親

つまならさとはしやなきもし舎とのこゑ秋の夜風ましと和せ

不逢恋のこゝろを　　西園寺入道前太政大臣

ゆとうます秋月の和の夜にしみやしとさへかたきなまん

皇太后宮大夫俊成女

さひねの夜ら和かにあるさこゑとよふまかせしかる

いつなりけり待ちの人まつらしきる

本院侍従

歌さつておかおかれかふへし夜ぬまゝにけらん秘とみまは

名所百首奉りける時

順徳院御製

菅原や伏見の里の篠枕夢もいく世の人めよくらん

恋十首歌合に寄筵恋

入道前摂政太政大臣

笛竹のよに里ならさ夜をのこるなき独ともねん

恋歌中に

従二位行能

長秋の夜ゑよ払ともしらてやへの月ともみん

建保四年百首奉りしに

前中納言定家

秋の夜すら月にまへてねさめ今にもまた払ひそ

思ひしらす

式子内親王

影刈て やとる月かは 夜もすから 秋かくさぬ 袖の湊よ

百首哥奉りし時寄湊恋

前太政大臣

塩小舟 よるとこそ見る 湊川 袖の湊ハ 名のミ成けと

恋哥中に　従二位親氏

ゆきそみぬ 恋ひわひとしるへせよ 八十嶋かくる 湊の秋まて

題しらす　よみ人しらす

志賀の海の 浦によるてふ 恋こそ 塩も涙と なりにけるかな

みちのくの ちかの塩かま ちかなから からきハ人に あはぬなりけり

苍の海の 湊乃流江 なかれても よしえん人乃 心そ

皇太后宮大夫俊成

わりなしな およはぬ恋に しつみては 我も袖の浦に

高子流よ行ふらひけるも女につかはしける

源家稽

長秋のはしはしにや しまの塩ハ 宿にたつやの かひもなき

中納言家成家歌合に

藤原通憲

恋の浪ハ 海とかはらし みるめなき 袖のうちに

恋哥中に

権中納言右大臣

難波潟 浦よりかへる ちかの塩 なはしつつ 恋や浪人

家に百首歌よみ侍ける時恋歌

後法性寺入道前関白太政大臣

いはでのみすくるよのさはおもふ人にひさへつれなき袖のみせとや

久安百首歌に　郁芳門院安藝

恋そめしこゝろのうちはしられねとやかてと袖もそほちぬれしらす

式子内親王

人しれぬおもひに袖はしほれてやみちのくのしのふの下草

源家長

白波のたちゐの井にさわくのをくの松かねのしつくそあまる

藤原親盛

ふしのくさかせに袖の(?)あさなゝ袖そほちぬと

源重之

こひわたる我恋は難波かたあしのうきねのたえぬ世そなき

藤原道経

まもるの(?)うつり(?)こみのおもひも我にしもや(?)うき(?)ぬれて袖はぬれにき

殷富門院大輔

うらみ(?)のこゝろ(?)の(?)まつ(?)かすのおもひもたえぬ世そかなし

道助法親王家の五十首歌に寄煙恋

権中納言定家

いかにせんおもひはつらき煙にもよそに浦風ものこるらむ

従二位家隆

契りや螢となりてまよふらん思ひのほかのあまりかなしき

百首歌奉りし時おなしくと

右近大将公相

さくらたにかりかの螢ひきてうち木末のさかえん

権大納言實雄

松陰やあま刈しか火をなそこりぬる思ひに立螢かな

太宰権帥為経

あまのさくり江の螢我方にもえひぬ恋の身をこかすかな

権中納言師継

くちやなの下にこゑて夕螢飛ぬ思ひのありとそみよ

入道前摂政家恋十首歌合に寄綱恋

藻壁門院少将

絶えても綱のうけ縄うきてのこるらんとこそ月に契

建保二年内大臣家百首歌よみ侍恋

前中納言定家

よそにのみ吹上の浜の浦風によはひてまたぬ思ひけんそ
影しらすす

権大納言長家

風をいたみつなりしかやく螢のなかそて方をさして枝

前内大臣家

難波江の芦分舟の行なやみ月ころまてよるへやらん
いかにせん須磨乃袖よ海士はあまた同し渚よるゝ舟路
正三位成實

思侘身をはしてやあるしえに文立ゆり恋をこそみん
寄舟恋
洞院摂政左大臣

見るめなきさ志る河乃わたしもりさり舟君をたのみてこかれわたらん
名取河わたるまゝよるまま世をへにけり中に恋
土御門院小宰相

あさ妹の洞のまやまにかゝりしは世の山井中乃瀬つゝを
恋の中に
京極前関白家肥後

あふせなき淀の川乃底にしは恋よ志つめる影を悲しき
荒木田延成

せきかぬる涙の河乃浮枕うきてみなるゝのかそけゆき
藤原永光

まれにへし洞は瀬と成果てあふせもみえぬ袖のしからみ
源家清

志らせはや積ふ袖の中に落る涙乃川の瀬をつくさむ
洞院摂政家百首歌よ不逢恋
従二位行能

いかにしてみけ小さけるとのはれなくや袖をとりて見むと果なん

恋のこゝろを

権中納言長方

しらるゝやさこそはみさゝの小篠原分けし袖にもかくや露けき

待賢門院堀川

とひやらんまたしのゝをもさいその松ならひふりかれ

女につかはしける

東三條入道摂政太政大臣

何ゝそのまゝん存ゆるさかりんふしつゝめあまとなるは

千五百番哥合に

後京極摂政前太政大臣

よそにのみ見てや思ひし葛城山の嶺のしら雲

正治百首哥奉りける時

前中納言定家

久堅の天てる神のゆふかつらかけていく世を恋わたるらん

題しらず

忠岑

侘人の心はちらとてぬるふしの山とや下こかれまとひける

京極前関白太政大臣

たえすふる思ひはなりすゝかなる嬢の高ねは我胸の烟も

百首哥奉りし時寄煙恋

鷹司院按察

いかにせんふしの煙は年ふれと忘れて程ふるならぬおもひを

少将内侍

桜さくとをちやまのはれえつゝとにさひありとは

前大納言基良

秋かりさひこゝまなかくや乃桜もおそ下むさふり

前参議忠定

春ふかは宮の八重よなにとなき花の袖は桜とみよ

恋哥とて

前大僧正慈鎮

身にしくさひかりとさへゆともなく恋わたらひやかなん

不遇恋心と

前内大臣基

さりとては命の程もなかりそといつまてはまつゆかなかるん

おもかしんと

前大納言伊平

岩かねに松のあさしとなをよ松とききんつかぬ離西松のなかれ

寄松恋

右衛門督通成

よそにのみ見ゆる乃渡松はありしや露よとなかき袖か

家五十首哥よ寄露恋

入道二品親王尊助

君を恨むことはよろしにやはしてもみるをや袖よ下の白露

恋哥中に

前大納言為家

おも道は恋を命に数よけり年月なかれのさへとて

入道前摂政家哥合に寄馬恋

源家清

足引の山高みたゆるとへてあらはいかに世をとなくそ鳴

題しらず　　　石川郎女

わをまつと君かぬれけん足引の山の雫にならまし物を

よみ人しらず

世中はうきを行きても悲しきを誰にかゝらん人のつまなき

しかもさえぬる歳月をいふにて何か世にありとしせん

つまなりけり世には行かりしもる

兼盛

こひしなんとのこそ恨つる人の涼しさを我よなりつて

恋の中に　　　貫之

哀てふことを心してぬく玉はあらて
しのふる涙なりけり

續後撰和歌集巻第十三

戀哥三

人にたまはせける

延喜御製

世とゝもにたえぬ思ひの涙川流て落る涙の白玉と

戀人の袖にかゝる時小弐命婦につかはしける

九条右大臣

秋の夜をまてとたのめし言の葉に今もかゝれる露のはかなさ

題しらす　　よみ人しらす

露はかりたのめなからん言の葉に思ひとゝむる命なりせは

世をそむかんとしけるをやめて

とゝまる人に　　和泉式部

なくさむる世の限りをもしらすその後もいつかと契らんとすらむ

身のありけるはなれとゆしあすまりてゆ

らあらはけをみなるかすゝめありける

返事に　　三條院女蔵人左近

惜しからぬ命は我もゆつりてんたのむことゝも誰によらまし

戀哥の中に

前参議教長

あひみんと偽るたにのあけ露の命のかゝりけに

百首哥よみ侍りけるとき

殷富門院大輔

身をうけれ我人ゝうらみかほにもおもはれしらん

恋しらす

皇太后宮大夫俊成女

うらみやたのめぬそれも契けめやそ別しらぬ命に

小侍従

待をみよあふ歌と惜む命かく我を忘しの心つらさと

契恋といふことを

平長時

あはれとまつ頼めしとおもひても忘ぬる恋そ

恋しらす

参議為氏

猶の人われをは人に思ひ出る恋そ

上西門院兵衛

宵の間もたのめし人やあけぬらむ今こんといひしたのめの

後鳥羽院御製

我恋はいかなる山の雲なれはよそにも月の影を隔

正治百首歌めしけるついてに

しら雲とたのめし人はいまはとてこゝろのほかの月をみるらむ

恋歌中に　　二条院讃岐

君まつとさても袖に枕のちりはらひて見し月

百首歌の中に　寄月恋

入道二品親王道助

身のあてとも忘るゝ宿に衛に寒き月を詠出つる哉
悲しらず

中納言家持

今更に待人こあや天の原ふりさけゝれは春も更行

藤原光俊朝臣

君こそは殿守をみむは玉のことひともみやこそさえ

藤原仲実朝臣

今こんとたのめし人のかはりせは有明の月とをまや

中納言資季

行先く待ふるゝさむしろに出るをまつさ有明月

大伴女娘

吹風になひきもしらぬ人ゆゑに我はいかなる世の葉の下草

山口女王

我之ひんと志ゝてみちのくちゝの志ほの波迄つきぬら

よみ人しらす

あつさ弓ひきみひかすみ昔より心は君によりにし物を

末無實忠てもうんを

従三位頼政

あさかする海に引縄のくるとはなれとも思はぬ君か

堀川院に百首哥奉時初逢恋

基俊

みま江の入日よわる白露のきえなんとも(?)おもひ侍る

久安百首歌の中に

皇太后宮大夫俊成

露払ふねまのこゝろけのすゝ枕ひてさへなれし秋のめくりすさん

前大納言隆房

玉さかに秋待えたる月なれはおもかけなる左前の影

具風

あらしにもゆかぬ草葉をとふものは秋の夜すからかな

慈円中に

神祇伯顕仲

うつりはの葉かくれにこそ鹿のなく秋生れ行あきれは

女郎花ひとりにて枕もとなるかなき

くれはよみ侍ける

業平朝臣

いかてかは鳥の鳴らん人志れす思ふこゝろはまた夜ふかきに

兵部卿元良親王家歌合に暁別

下ひもとけゆふつけ鳥の声をさへけさは別に我そなかるゝかな

よみ人しらず

入道前摂政家歌合に寄鳥恋

洞院摂政左大臣

鐘のねは程ふるさよの体としひとよ又ねとなりにける鳥のこゑかな

後朝恋の心を　前大僧正慈鎮

恋しくてわすれ草とてつむとも志のぶの露の袖の暮哉

寂超法師

ゆるされぬ枝にうつる涙こそうき見えもかくはまされけれ

藤原光俊朝臣

送るは人の別のみちなれは夕つけ鳥もなくはよし

皇太后宮大夫俊成

暁の別をしてそしら露のおきてもあかぬなごりさと恨けれ

家百首歌よみ侍ける時後朝恋の心を

洞院摂政左大臣

暁は別来りしならふみねの嵐の後に雲ぞのこれる

おなじ心を　土御門院御製

暁の涙ばかりを形見にてわかるゝ袖にしたふ月影

尚侍家中納言

我宿もあり(ゆく)衣ゝの月影にいかにせよとかおきわかるらん

参議為氏

きぬ〳〵の別しなくはいかにそと猶そまたまし有明の月

西園寺入道前太政大臣

忍ぶとも又我やゆかんとばかりにふけさ恋路の夜風のさ稿

又家源清子に給せける

延喜御製

秋霧の中にかくさん玉とけさ[illegible]そのこそみまくほしかれ

題しらす　　左近大将朝光

霜おきて鳴く枝にいとしくしらるゝ宿もなき[illegible]

女のもとよりかへりてあしたにつかはしける

道信朝臣

露よりもはかなきものはけさきえて[illegible]見

雪ふりたるあした女のもとよりかへりて
つかはしける　　左近大将朝光

あかすして帰るみ山の白雪は跡もなきさへとまりけれ

返し　　よみ人しらす

とゝまれはいつ[illegible]かへるさの山[illegible]てふみわたるらん

題しらす　　業平朝臣

あひみてはこゝろひとつをかはしまの水の流て絶しとぞ思ふ

清慎公によみてつかはしける

中務

わひそれ絶えし人の心はきはなくなりゆくかな

女につかはしける　　清原深養父

恨てもしるしなきものはなくさめかねつ袂にはかなくもせん

人のもとにかけてわかれけるへにつかはしける

業平朝臣

いとひても猶別のかなしきはおもしろくまはらまほしきを
いつならひけむ何ふる人を猶とせまし

亭子院御製

雲ゐにもかよふ心のおくれねは限りもしらぬ
身にこそはひとりとふ人まつらけれ

和泉式部

あふとはふもいさす命さへくるとしや限なりなん
人とゝみくさに据いつとちるひての
ちかつりき

清少納言

我袖はわかゝんをしたひて又あふことちかひけれは
もしらす

平忠盛朝臣

逢坂の関こえてこそ中々に夕つけ鳥の音はなかれけれ

在原伊光

なにせんよふりぬるめきて東路や越て逢坂の関をこえれ

藤原時朝

東路はまさゝ逢坂とて別ともかよふ人を関守はなし か
百とせのちまてしられ寄関哉

藻壁門院但馬

思ひきや越て過しゝさ逢坂の関とはあるゝ波寄せ哉

恋歌中に　　西行法師

うき夜をちる事にはしまらかさて物は思はさりけり
ひとりしられぬ人につらけり

権中納言定家

いかにせん別を限りてこの世ならん心からいは
物へまよりきのたとこへの人まての命おし
こよひ中とせく待ける身に

和泉式部

おもむ人の命はかりとせよ海もたぬ身をそのみ
人はあはれとも見せける

光孝天皇御製

忘れて忘れ時はつまくと付ふはかなきさりけれ
亭子院によみてたてまつりけり

監命婦

哀てふ人やあはれと武蔵の草とにもゆかりけは
かきわけふれつつ蔓し来る人

亭子院御製

あまてらしたのまぬ山河のせよりなくらに我身なり

清慎公おかねよ待ける時つかはしける

式部卿敦慶親王女大和

人まねのちかひもかなしかはらくは恋は深てくゆりそまされ

返し　　清慎公

ゆふのねは絶ぬ恋しまさるとてくゆるハつきぬ思ひなりけりあひみぬは日をへてゆけは女まはなかりけるまさる

業平朝臣

思ふすハ契りもとめと云ふのかりふしにあまのまてかた（とり）
ゆみゆる女まく久しくあそはかりけむ

権中納言敦忠

行てとりしともふしよなさえてまふる世まも行つ命ら

百首歌奉りし時寄風恋

大宰権帥為経

嵐こへのとよ山風さやかに独ぬるよは吹まさるなり

寄雲恋　藤原行家朝臣

伊駒山峯にあさかる白雲のたつ中はなとへたてつつ

寄日恋　後鳥羽院下野

打くら山の日影のかけてなと思ふ人よ乱れそめけん

右近大将公相

たちかへりしのひはてむとおもふ世はよもの山の様なれに

藤原為継朝臣

我文いかなる世にかれむしのひてそらさへつれても人をとふらん

題しらず　　小弁

くもりともいかならん世の雲まよりみえかくるべき
秋のよの月

續後撰和歌集巻第十四

恋哥四

寛平御時きさいの宮の哥合に

よみ人しらず

いとまで今はかぎりと思ほどぞさらに昔の恋しかりける
心からもまかせぬ人をまつなりけり

弁乳母

恋さへつゝけふこそやまめとはとて我のみなりてくれむとすらん

後法性寺入道前関白家百首哥に逢不
遇恋

後京極摂政前太政大臣

こゝろなよとゝめしひとの別はその暁やかきりなるらん
恋歌中に　前大納言資賢
限りなくうらみし中とこそ妻にといひもはてゝ又なかきや
順徳院御製
一夜にはさのみはてもたのまれてやまた人の心
尚侍家中納言
かくしても又そとおもふ深そとこえいつともわかぬそれ
恋の歌とて　前内大臣基
恋しなん後の世とても頼まれしこの世にはあはぬなけけきと
十首歌合に逢不遇恋

前大宰権帥為経
つれなくそいまそ恨さを歎けるかふなるもて命なからや
わかれしをよみ侍ける
従二位泰光
みもはふ契りやあるとたのまする行末なき命なからまし
別恋　中臣祐茂
後の世とたのめしもなを命ならで今こそなけれ
源有長朝臣
後よ又わかれぬ年世我はこそふる老らく我身まかせ
家に百首歌よみ侍ける時逢不遇恋

洞院摂政太政大臣

もろこしも聞しまくにかはれとも同しそらの月やみるらん

同し心を　前内大臣家

我為はかはらぬ月のかけもありしよに似ぬかけとやみらん

後堀川院御時うへのをのこと寄月恋と云

心をよみ侍けるに　大納言隆親

めくりあふたのみもあらなんのちの世は月をかけて契りやはせし

入道前摂政家恋十首歌合に寄遠恋

藻璧門院但馬

一夜ねしかりそめふしのをやま遠今は越とをさかりてそこしく

ひさしくきこえしかたのをとつましき女

まうりて　前中納言定房

夢とのみおもひ返しなは夢となるなかにもしらすわかのすらん

契しらす　大炊御門右大臣

おもひきやうきはそのよのかさねても君と夢にそみえしとは

中原師尚

たのみてやこゝろほとなくねとおもひはたゝにもすきの嵐

藤原信実朝臣

あふことは昔かたりの夢なれとおもひさめやとおもひけりやと

皇太后宮大夫俊成女

迄とみゆるはあはしまよりもまさりける螢の光流ゆく

鷹司院按察

水のつゝむおもひをすゝむともかくれぬ螢世やをみゆらん

前大納言為家

たえまあるとも絶ぬるひかりのかけさて螢にみゆるかな

藤原為継朝臣

いふねてそをりくら見えし螢こそれはその代かはりやせん

真昭法師

雨ふりしくに嵐のうつれはなくさめとてうちよみゆく螢ともなし

前中納言定家

ゆくそらにきえとなすゝめのうへの山にて螢のみえとみえけれ

百首歌奉し時寄橋恋

前太政大臣

葦ふくに通ひし中も絶果ぬるやそのよはしのつきさくし

中納言資季

葛城のかみの契りの岩橋や絶しかひなくおもひそめけん

花なしくとよませ絶しけり

土御門院御製

夢なしてみやこの人の白露のおきわかれにしまゝにつゝさく

建保三年内大臣家百首歌よみ侍し不恋

前中納言定家

忘まじなきつき橋とひねよかよひてこゝは岸にみえて
白玉乃手形の橋わたるとてしらけて落る袖の波よ

題しらず　忠見

人忘れまじと渡るそのは橋なれとやむといふことは絶よせぬ

橘俊綱朝臣

忘れめよせこの長橋なかくて行世中にはみし渡りは
人よみませけり

光孝天皇御製

洞川なかれてことのくもには人乃渕せとよしぬ故なり

題しらず　中務

绝つもこの世はかへん渡り川後の渕せを誰かとはまし

寂蓮法師

契りきなかまし忘れにしよ袖ぬれてうらのふたゝびの秋

祝部成賢

しられてや行ふかれ渡しせにおちむもまた

堀川院御時百首歌奉りける時　基俊

わか宗をもとめてもわたせぬ玉乃世に夫きゝ恋ひしきゝ誰かあるはり

入道前摂政家恋十首歌合よ寄綱恋

藻壁門院但馬

なく網のしきさへめふしよせて又も浦にや引まへらん
思ひて掛けし女もとりはなりぬとて
てけるかきも 皇太后宮大夫俊成

人志れぬ入江の波よ志をれて いかなる浦にかゝりとまらん

恋歌の中に 京極前関白家肥後

芦火たく志つの屋に燻くゆる思ひよむせふこゝろ
ひけしくれとせさりけるまつかしき 法性寺入道前摂政太政大臣

あふことはなにはたかさなまこや数ならん思ひは絶てとしの手
恋し 馬内侍

とふぬまは袖打ぬれて数ならぬ身よりあまるは涙なりけれ
題しらす 読人

思ひては草木にかゝる露の消つゝ我は恋やまさるらん
前内大臣家

忍ひのみやいふにいふと恋しのもしほ焼くとありぬすか
新たにて掛けきる人内よりはまいらる
よしさてもあふひに出付てつかりけり
右大納言公任

ありとてもあふ掛けそのみよ絶りかほてしあふひ成りり

題しらす　　式乾門院御匣

きのふのやけてあふるまつらの月はなをみえかりさと

西行法師

我袖を田子のもすそにくらへてやいつれまさるとぬれはまさると

よみ人しらす

夏草におもひぬ物をふるさとのふかくなりにけるかな人のかよひちをとやかとて

京極前関白家肥後

夏山の梢にあつき蝉の声秋かと人はいふこさめり

女なりけるなそしことを折りてつかうまつり

けるに

左近大将朝光

誰まちにこひまさへておもひつゝさきめても猶家夏なれと

夏恋

源家長

よろつよもいはおもひもあまたなれは蛍も蝉も身をこかすらん

建保三年内大臣家百首よみ侍ける夏恋

前中納言定家

芦のやよ蛍やまかふあまやたくおもひも恋もよるはもえつゝ

七月七日女御徽子女王につかはしける

天暦御製

こよひはゝわたしにやさん我かたの門の川原はわたりせむ

七夕乃衣〳〵の袖ゅかさねつゝみ小

小弁

七夕となかめしやむなふと掃ながきはたなり志世

思しらず

和泉式部

月はさて象かくれつゝなりし秋吹風と萩にきけん

前太政大臣

夕暮ハ天津空なる秋風に知られぬ人を恋て

土御門院小宰相

潤ちる袖に玉まく葛風にかかる妹風吹くとゝきくにて今

式子内親王

秋ハきぬ知られぬ我をたのみにてことハ本意なくて

入道前摂政家恋十首歌合に寄衣恋

中納言資季

月草の花より衣かへすのこん風にのみうつりゆかれ

道助法親王家の五十首に寄露恋

正三位知家

おもひの妹の露ちりしみ（そ）ら葉そ色かへりけり

恋の色風の中に

前中納言定家

宿り世し庵の萩の露きえて消なそ袖の色にぬれて

従二位家隆

なかめしとおもふもつらし果てはおそくやふくる秋の山里

九条右大臣

秋萩の下葉色つくと見る時そ独ある人はいとゝかなしき

宣耀殿女御さとにまかりてけるに

天暦御製

白露は我をたゆめしもみちはのかくにいろまさりては我なみたにて立のくと

好忠

さらぬ風は秋としに吹ましものを我そ人はなとつまそ

参議雅経

太かみの姫をといはすかとしはるひゆくと気しそみる

従二位家隆

秋のあさみのうら風露のへにわけて袖そ人におとあそ

昌泰四年八月十五夜哥合に

よみ人しらす

なかしてゝ行のふ秋も気くてふるまにはそゝろにつらけれ

思しらす

伊勢

秋萩にうへみえわたそおもひ身のうへに秋の霧みえたる

権中納言定家

秋のには錦の庵にふしてかさねつゝも思ふ

よみ人しらす

秋のよのつきに影をは人毎にみてまて詠つられ
霜のまよ残は遅望へとしもはやたかさとのわれにはうえん

恋哥中に　　前中納言定家

契り置し末のはらのゝもとかしはそれともしらしよその霜かれ

お大納言基良

涙子為絵は今いさ浚てみなめの湖よりて袖哉
ぬるとてもみんすとこそ契りし人にわかれ
しけれ

相模

いふ小せん志らひの磯の涙子為ふり絵色くに似こそあと
思ひしらす

元輔

あるかにしられしもせし涙為のつりかたとひは
こたへてたにもへき

續後撰和歌集巻第十五

戀哥五

題しらす　よみ人しらす

三輪の山しるしの杉ハまちすれと人ハ我をたつねん

まそハ我れ留主乃山も我なからんゆふおもひの煙ならねハ

いくさき○とひとひなとこふる事に　和泉式部

ととしふるそ後の思ひをとりみくまのゝうらの濱ゆふ

いまはかりの中けるかなり

前深来

今はといふ行末とつかはし昔契りしそのこれ世ハ

恋の哥の中に　権大納言長家

忘れなまし待ハそれならて別しとのふりまけれは

女につかハしける　源信明朝臣

けしきふかくのこゆる松山ハ海のありともなく波こゆ

こし　中務

秋といへと色かハらぬ松山ハなにとも波のこえんものかハ

恋の哥の中に　皇太后宮大夫俊成

波こさハうらみんとこそ契りしかいかになかりし末の松山

ちらへとやけるかなり

祐子内親王家紀伊

おと波と見ゆることのはの末も我松山こえし思ひ

かへりにけりなとかくなる世まてこえなむと

みのめをきかるなやむと侍けるを久しく

おとし侍りけるにつかはしける

和泉式部

しめのうちの袖ともみえぬ我身かなを誰にかとはむ

家六百番歌合に寄舟恋

入道前摂政太政大臣

おもひわひ乃ときなく松浦舟いくよかなしきよるへなき波

後堀河院民部卿典侍

みなれ河よらて我身こそ渡りぬれ舟をそつなく我こそ恋もミすゝ

恋歌とて

藤原光俊朝臣

難波女の芦火の煙立とみかくさすよにりもえつゝ思ふらん

被忘恋の心を

前大僧正慈鎮

思ひ出るひまもあらきかはしらすや忘れ草摘と我はおもひける

題しらす

順徳院御製

おもひ侘さてもまたれしいつはりのなかなる物によはりはてぬる

徳大寺右大臣

忘ゆく身はうきものをよそにてもたゝまちしかはこそたのまれ

源具親朝臣

今はとてあひみつき枕のちりをはらふやはらはぬ人

寂縁法師

身のめつゝこれをと待しおほそゝまことにしらぬ言の葉ぞかし

久安百首歌の中に

待賢門院堀河

忘れじは人はかはるもみえぬ物を我のみぞそ立かへりける とぞ

人をつらしとて

相模

いふにても忘らるともみしひとやかはあやしくもとひてとはまし

題しらず

前摂政太政大臣

いかにせん雲の上飛ぶ命なりせば人のこころを

赤染衛門

契りしにかはるの程ぞとこふるせめて命もいきてまさらば

和泉式部

あらぬ人に悲しき折は今はとてまたぬる人の跡とりたるかな

百首歌よみ侍りし時寄鏡恋

前太政大臣

思ふとて我かみえぬます鏡うつりし影は人の心を

入道前摂政家恋十五首歌合に同し心を

後堀河院民部卿典侍

とゝめ置て行ぬ鏡の影ならは渡てそこえやはみえけり
影しらす　行念法師
山鳥のをのゝ鏡ますみのゝきよき別の影をしそ思ふ
絶恋のこゝろを　土御門院小宰相
我ゆへとおもひてそ忍ふつれなくて猶同し世にすまんかきりは
尚侍家中納言
偽となりそ人も契おかんかはらぬ心ひの世につらぬあれ
九月十三夜十首歌合に寄月恨恋
今上天皇
こぬ人をまちえて待しよかりし月そ恨は猶そわすれてき

権大納言公基
月やしれ袖にも知やしらぬ人の俤そへて恨むとは
千五百番歌合に
後鳥羽院御製
逢月のころもひはまれなる夜のしのゝめよりも有明のそら
恋歌の中に　前内大臣基
契りしそのゝよは昔に有明の月はかはらすもなく
内大臣
つれなさをかこちても今は有明の月をそ人の形見とはせし
百首歌たてまつりし時寄月恋

左近大将公相

ちきりこしひとよもなし有明の月ハ別の袖にかはりて
ねかしらそ　大宰中将忠基

こぬよひをつらきねかへ月影を暁つかりかけみえん
藤原信実朝臣

山のはにわかるゝひとこそ恋しき月はへおもひぬ有明の空

九月十三夜十首歌合に寄月恨恋
権中納言師継

思ひ侘さ待やなくさむと見えぬつれなき有明の月

逢不遇恋
陰明門院大弐

待しよに思ふ物から有明のつれなき月そ形見なりける

今こんとたのめしはかりなかりせはいかにかならむ有明の月
藤原為氏朝臣

うしやまた忍ひ物をおもひつき中ふつゝうへき恋

入道前摂政家百首歌合に寄鳥恋
正三位知家

歎き侘ねよふのうきなかやらそてうき鳥もそまよ
おもひきの恋とゝふらんと

賀茂種平

はつとりし給もゐある後よりかみのことなまて
ゆすらし筆のあとゝたえていひける人の
ぬるかな
業平朝臣
忘筆ふとこにさく梅かへはかゝるちりにもにほふ遣
をしらす
よみ人不知
陸奥のしにおもひそてふ忘貝忘れぬ身こそかなしかりけれ
忘れぬる人そいまはかるしめしさへはちりとおもふ梅かゝ
藤原成宗
今はさとてそ年ふる君もうらやましあへはみをさそへとも
寂縁法師

今さらにこふる人をとゝむへきむまはしかれのみちもあらはこそ
惟宗盛長
うらみ絶ぬよるさへかゝる衣手のいまは人をは恋はつらし
被忘恋
藤原盛方朝臣
忘られてそのゆふくれを思ひ出る我身はいかにはるゝ恋かな
恋の哥中に
興風
おきふしてまつほとこひのさむしろに梅やまたれむ人さへそなき
弾正尹元平親王
立よりて待もみるへきかけなきにおひ待しさりけまくし
ふりうる泪のみつからしなゝしせるをしれ

藤原信隆女

せかゐにまとはゝ山の花さそふあらしもちらん
きやしきやゝ浦りけりなとこそきすあふ
つきかけもまたうちかしつる思れて

高陽院木綿四手

忘られぬゆくみちの夜は草のはけに露なかゆく人ちらそて花は
思しらす

人丸

足引の山田のきつねひとりのみ忘るゝ人をまちそわすれ

小町

志らぬ人としも忘すきつきのころもかはらぬもいさや物思して

中納言朝忠

白波乃立よりかゝれ濱千鳥跡や波にきえて人めかん

千五百番哥合り

前大納言忠良

白波ぬ雅よるほしみちのなかれ思ひ果てまつの木ちかき

百首乃哥よみ侍けるに

殷富門院大輔

よくはるも忘れしふゝもきさふれ夜をこそたゝなみの思ひ出よ

百首哥たまはりし時寄関恋

前大納言基良

へ道ゟ我よひらくとならふみちをゆきて後こそよそに聞る

絶恋の心を　前大僧正慈鎮

何ともわか後世を思ふ世中よも御てをりかくるゝ道

久安百首の歌の中に　皇太后宮大夫俊成

人をのみ待つらむ人のはかなさを捨る心をつまはかりけり

法性寺入道前関白家よ慈恋といふ心を

左京大夫顕輔

浮しとてのまには捨ても後はいひよ思ふ人のかや

恋の歌の中に　寂蓮法師

かなのつらきもむかし方ともおりきませ身をうき物よ思ふなさけなし

八条院高倉

身をさくて又もこの世よめくりあはゞわかれつゝからんとさぞ

懐恋の心を　西園寺入道前太政大臣

重ねてそ云ふ葉もなきさま葛原猶をとうき常盤の秋風

うれんのこゝにしまれおまに身をうくいふうらん人なんを

従二位家隆

頼て今いかね身れまま秋風の世の波の下にくちなん

題しらず　藤原基俊

波よ干す磯への芦乃ねまでのそて人なきさはいまそなれ

躬恒

あまの漕出し小舟綱手あしひしへとらしみつか
さもえよける人なり

三條院女蔵人左近

こゝろふらむともなしこのはれねえつらを
さしせてしかれ

続後撰和歌集巻第十六

雑歌上

家に百首歌よみ侍けるに

後京極摂政前太政大臣

風の音も神さひまさる久堅の天のかく山幾世へぬらん

堀川院に百首歌奉りける時山を

権大納言公実

神さふるかつらき山のみねにはあさゐる雲のたえぬ日そなき

権中納言国信

こゝろふしけみか下に苔むして緑のふかき山のおくかな

基俊

奥山の岩ねか上に菩提立かゝる雲にはしらふとなし

東北院のまへのやりみつのまよひけるをみてよみ侍ける

紫式部

きえそてもらきら波落そひてうことかほしき瀧の音かな

前参議経家に侍ける時布引の瀧見にまかりてよみ侍ける

前中納言定家

音にのみきゝし瀧をもけふそみるありて浮世の袖やぬれなと

名所哥めしけるついてに

後鳥羽院御製

布引の瀧の白糸うちはへてたえま山風よりもきてみすらん

布引瀧をよみ侍る　従二位行氏

天の川雲のみをより行水のあまりて落る布引の瀧

題しらす　大炊御門右大臣

河上にあまてる芦のみたれはにしめゆひかくる岸の白浪

基俊

芸聲川せゝや村雨ふりぬらん岩まに瀧つ音とよむなり

人〻に百首歌めしけるついてに

順徳院御製

あすか川なかす淀によ吹風のいくへこゆるかのこる月影

題しらす　よみ人しらす

初瀬川なかるゝみをの世をとゝめてこそす波の音そさやけき

八幡乃山本に侍りてよめる　勝命法師

いくよかへる瀬のよとのこと枕にそあかしかね結ひそめけん

題不知　赤人

芦へより吹くる風よ白浪のをとそみえ海のはま

よみ人しらす

住吉のえなつに立てみわたせはむこの泊りゆ出る舟人

権中納言国信

堀江こくこの小舟やいつみの難波の春の海潟かす
みふかくゆくへこそみえし中に
前大納言為家
みちのくに難波の浦は白妙に波よりて出る月影にまされ
浮行し侍ける時よみ侍る
覚仁法親王
春かけて行まに笠屋の住若みちくる汐の程もなき海は
百首哥奉りし時浦千鳥
前太政大臣
わかの浦やしほひの潟に住千鳥昔の跡をみるもうれし
なかりしとて
朽果るなからの橋に跡まされて昔をとへし忘るゝかれ
寄橋述懐といふことを
兵部卿有教
独のミ我やふりなん津の国のなからの橋は跡もなき世に
老をなけきてよみ侍る
従二位行能
おいそめのこの浦の松末まてもとまりとはに老そなかしき
前参議忠定
昔みしかけもいかにかはるらん月はいつくにすみのえの浦

延喜十四年女四のみやの屏風に

貫之

おほしこそとよいへとも出てすみ梅のとしもふる雪そ降る

同廿一年京極のみやすん所の春日社に
まうて侍る日やまとの国のつかさにかはりて
つかうまつる

躬恒

年毎によはふる流ゝつ子すみ猶盛はなやかにさかえん

枇杷左大臣しめて大臣になりて
侍けるによろこひに侍りて

貞信公

おりてみる袖をもぬらす梅もふくていは春にあふらして

返し

枇杷左大臣

埋木は花咲春もなかりせはまちつる枝を誰か折まし

貫之去年の冬そのかり侍ける所ふく
なきさの院の梅花を見てよみ侍ける

よみ人しらす

君こひて世をふる宿の梅花も昔の香にそ猶匂ひける

春の歌の中に

好忠

浅緑山は霞にうつもれてあるかなきかの月をみるかな

人なくすさむしに侍りける時内より花のさかり

みまかりしさうし作ともありけるハ　赤染衛門

誘れし小野の世をはかなし花桜人にはてゝ雲居にそ悲しき　藤原清輔朝臣

覚しらす

ならむ月そをふともおもはぬよしも花ハ以まれ世の中をは　源兼朝

七十の春を秋の月にかはらしともおもひこそすれ

おもふことまて花を見んとよみ侍ける　静仁法親王

世をそむく苔の袖ハ春の宿さへ月を捨てゝ花の別道

花五十首中に　雅成親王

花もまたなれし別やおしむらん後の春たに人をたのまて

建保四年百首歌奉りける時　入道前摂政太政大臣

あふちねの歌のいさめに捨しより花よ移の春そ忘れぬ

参議雅経に花をそへて侍りけるかへし乃

ゆくらくとおもひやりてよみ侍ける　藤原家隆卿下

ふてよみし桜や折ゝなかめん見えけり頃も年ハ経にけり

あめまさの朝臣石清水臨時祭の使にて侍ける

としまひ人にそへりて又の日つかはしける
なにさしてつかはしける

實方朝臣

くるゝかさねの花は陰みえし昨日のふちそ今日は忘さ
暗縦もそとしひつゝみてよ三待まつ

藤原親継

河のりて三重那見たりさしては春に別し山吹の花

暮春乃心をよめる

賀茂幸平

老ぬるはいとゝ春こそ惜まるれとしくてもあひみん

惜むともおもひとたのまれし身を老らく春の別も

正三位知家

左兵衛督基氏

いつまで我身を春に別るなれは三月の暮は惜さ

卯月廿日あまりの比すゝりしけるに梅しの枝に
こりてさて作りける小桜の花さたりにみえきを

まはよめる

浄弁

梅の枝は咲けるもの色もうつろふて惜しらぬ山さくらかな

上東門院にまゐらせるとて

権大納言長家

そくても昔の袖の香にこそ花橘の香をとめてとひけれ

御返し　上東門院

梅の匂ひはかりもなにひとつ今も昔のかけはみえまし

夏の中に　従二位家隆

老ぬるをわれも昔の人ならは花橘に袖のかそする

藤原孝継

枕とて結ふはかりそあやめ草ねよとあかる夜はのまたれは

正三位知家

月はくてうさみの池のあやめ草引人もなきねなかつきせす
なきぬる夜の緒をかしく

堀河院　中宮上総

ほとゝきすかくれも有ま五月雨にうきあまりつむあまの苫やと

題しらす　平長時

みしまの難波入江の五月雨に芦へをわけてかよふ舟人

信河法師

徒に老その森のほとゝきすなかはつれなと思ひ鳴らん

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

わきもこか世やみのまゝにも夜の日をとてとる蝉の鳴つゝ

七夕の朝　平泰時朝臣

明ぬとも天の川霧立こめて猶夜をふかきあかつきの空

中原師貞

天津風猶吹とちよ七夕の明る別の雲のかよひち

秋歌の中に

寂蓮法師

身をつめは草葉にいそくとしもなきはかなき露を袖の露と
槿と

参議雅経

山川の末に袖垣結ひ出の花はかへて都しとは渡
覧しらす

入道親王尊覚

秋は猶庵の時ともなくすむ山里に夕くれのそら

家五十首の歌よみ侍りける時

曉庵

入道二品親王尊助

契ある山の秋におこるさを猶つきいとまきそなは

秋の歌の中に

僧正行意

みやこ人袖をいかにとふ露の色をも明暮し秋風そ吹

大納言通方

暮ゆくも猶さなき秋の田に穂なみの露にやとる稲妻

従二位家隆

老の身は残る別も月にはおもはぬまてうつらん物の夜の月

津守経国

詠つつ流る世は人の老を世そ月ともみよその秋や忘る

八月十五夜よみ侍る

平政村朝臣

くもりなき空にみえぬる秋のこよひ山の端の月

藤原泰綱

こよひとやかねて嵐のふくからにくまなきさ山の端の月

月の光は中に

前参議忠定

峰の雲みのよそに故果てみし秋の空の月とこそみれ

後法性寺入道前関白家百首に八月

皇太后宮大夫俊成

世中をそむきそこれと秋の月同し空にそすめる身

九月十三夜十首歌合に老の後しめ

てめしいくたひ名にし月といふことを

藤原信実朝臣

秋月さて幾たひ山の端にこえしと月のみゆくへに出ぬけむ

久しく年へてふるやこころの月のひかりて綱

けふ九月十三夜月くまなきをみてけふ昔

物思ふ人のよにつけしけれ

平泰時朝臣

影そともくゐぬ月影に昔の秋をとふしてそ見る

秋の夜の中に

藤原基綱

月に猿の秋とそへてあかしきは独かなしき在明の月

経乗法師

こゝろのみ明石かたにはこの洞の露のなみたやそゝかん
西山によるみ給ふころもしとさて

前大僧正慈鎮

草ふかきやとのあたりに詠たにうき世と絶つむれぬ哉
覧しらす

中務

秋とや秋ふけぬる乃蓬生ありとかさねとはなくらん

光西法師

色へてやふく人をと月かけもうらむらき本葉とさら嶺の
山里

九月十三夜十首歌合に紅葉

祝部成茂

なそらへは花乃にほひ山こえて板らふきまさ紅葉をそちる
秋の暮によそ給ふ　後堀川院民部卿典侍
形見とそ残る涙のいつはり秋乃別にこゝろなからん

前大納言基良

月を秋の木葉は後の山風に残る露をは哀とそ思ふ
かりしらぬひ給ふ蛍の色はちりにおもえ
けふ八坂の寺た大臣ぬりしやつらし
きる

皇太后宮大夫俊成

昔より秋の暮をはしりぬれと我そはしめなるさ
憐乃くれの宿とて
寂身法師

長月の有明をまちとしひさしてそつ我月に秋はおもはれん
影しらず
左京大夫顕輔

ともし火のかけをたのみ時雨も月にもえむとすれはかなし
菅原因成長女

捨し袖はかさなりみちぬ時雨やなみの涙なるらん
おりふしと絶けるかな
小野宮左大臣

よの中にふきよるかへることなき物は木葉なりける木の葉の色
萩を
菅贈太政大臣

ゆふかけまつすねそのここそ鳴萩乃花も色あせ秋は過ぬと
影しらず
前関白太政大臣

なかなかにひとつの神無月しくれは時雨そ悲しき
正三位知家

かりそめの我身そらなる神無月袖はいつより時雨そめけん
ことわりて故人にいさよふまて清輔き
まてともみゆらん
如願法師

昔見し嵐の山よりさきて木葉はさそふよはの涙かな

ふるさとをたちかへるまでてらすみゆけの時雨

長月のころありあけのつきをみてよめる

藤原清範

斯河面秋をつくすは光なきの此のそら

題しらす　　後鳥羽院御製

秋の露やたもとにいたくむすふらん長き夜あかすやとる月かな

貞応元年とその頃秋月まかりける

ときいろいろにおもひて前中納言定家卿の

小倉にかりける　　西園寺入道前太政大臣

月のゆく雲井はひとつかはらねは女のよそにへたてしそ

返し　　前中納言定家

こゝろあし女の宿世にふりて我みし夜月そふるけき

ゆき乃おほきさ木のいまゝちうき秦嶺に過り

けり時ともわかりゆく小忌さそ待るらんと

みよつらりける　　よみ人しらす

まてこん秋のつきかけしらすもしたのみ旨数乃山すみ

返し　　おほき政大臣

わかてみらんのこゝをたのまれそれともしるねともみ

此時祭の社にありてまへりけるにその葉

人はさかれふりとまりけるかくそしよめる

藤原永光

打しをる松風の雪の消えてハ乱れてそゆく山おろしのかせ
大空のにはかにくもみ絶けり

前大僧正行意

道よりも雪ハふりぬる山路哉わかぬつらさへ色なき世
としのくれにもよしゆきつゝ

後摂政太政大臣

うき道の世ハ人とおもはされしかん出道にも行年の暮

法印覚寛

身老てもむかしの春ハなをそてふまて月に老らくそしらぬなる

源親行

いつはりにゆきてハかへる年月のつもりつもりて我身に積て悲しき

信阿法師

むかしまて身の思出かりそれたのしき向しゆめの夢
さしの夢に基縁りとみてつらんけり

法性寺入道前関白太政大臣

すみなれてこしゝ夢なかそつひにいつ世をすくさ

秋月如らん

續後撰和歌集巻第十七

雑歌中

題しらす　よみ人しらす

山のはにいさよふ月をそむくとも待つとそ秋をすくしきにける

源俊頼朝臣

ありし世を背きはてにし道果てゝ月をなとみる

月ころこもりける秋法勝寺にありて

よみ侍る　祝部成仲

なかむれは空行月も秋よりはひかりそまさる

月の歌の中に　荒木田延成

老のまる身にそへてこそ惜のよの月みるたひにかりの過と

寂蓮法師

なそもかく山にはましのあまの道月を哀と思ひけん

藤原信實朝臣

月はなほもとみしわかりし世中にうき身の哀といつなかまん

藤原季宗朝臣

いつまてとなけく月を見てこの秋も空の身を思ひて

藻壁門院少将

うきかくし身をはなれぬ世をそて月と数みそやる（かへ）

寛治元年ふてひ攝政詔かくしたまりて月

くまなき秋直廬にゐてよみ侍
けり　　摂政太政大臣
ともかくや露の命のきえぬまにみを雲の月とさえんと
思ひしらずや
藤原隆祐朝臣
世中に猶有明のつきまてや清き光も月はみるらん
建保三年内裏歌合に野暁月
藤原康光
里遠き野中の庵の月影に鳴て秋ふかき鳥の声
題不知
賀茂重保
見る人はいろをとめぬ故郷にまた有明の月はさえけり
藤原義孝
有明の月は空にのこし山のはに出しも人のいりやらぬ哉
古寺月といふことを
正三位知家
昔思ふあまの山風ふきさそふ秋の暁すめる月かな　けり
高野山にこもりてよみ侍ける
源具親朝臣
今はそれ高野の山の月をみてなかれみ法の光しらるゝ
後徳大寺左大臣西行法師かくしたひて
大原にて雨のふりけるに来迎院にて寂老人

述懐といふことをよみ侍りける
縁忍上人
山のはに影さへ遠くなりにし月日まて
思しらす
後京極摂政前太政大臣
山寺の暁きく鐘の音に夢になれれはいのちまてかな
家五十首歌よみ侍けるに　暁述懐
入道二品親王道助
契あれは暁ふかくきくかねの音にひゝけて夢やさめなん
昔を　土御門院小宰相
昔おもふみやこの月の影すてて夜寒の衣昔そおほゆる

東山西林寺庵中といふところにすみ侍りけるころ
かくれすむとおもひける世をのかれてそ
よめる
貞慶上人
明暮は心にかけし草の庵の西のゆふへをそまちわたるかな
鷲尾原を　源光行
おくりにし雲かくれ行独たに身をはかる山の井
山さとにすみ侍るころよみ侍ける
八条院高倉
なくてよそにかへりしやとはうきふしの草の庵
なくての心を
法印實瑜

いはてそれわするゝのえ猶捨によまんみし人のこゝろかはるなへ

百首歌奉りし時山家を

入道二品親王尊助

うきことを物わすれし乃苔水にうき世をすまて絶ぬ道

世をのかれて坂山里にすまひてよみ給ける

梅察使隆衡

峯は雲麓の霧もまた晴し山かけふかき心あるらん

藤原光俊朝臣

山下風に峯の木の葉の慈にさそはれてうき世はかなき白雲

素暹法師

住なれし都をなにと別きていまはかへても我身なるらん

前大僧正慈猷無動寺に住給ける時

つかはしける　西行法師

いとゝいかに山を出しと思ふらん心の月を独すまして

返し　前大僧正慈鎮

うき身こそ猶山陰にしつみけれ心にうかふ月をみせはや

年比西山にすみ給へるか都に出て住家を

くらゐ給りて蓮生法師かもとにつかはしける

入道親王尊覚

山里はすみしまゝ猶袖ぬれていかにうき世にまたなれけると

返し　　蓮生法師

法の水にすましし心のさやけれはけふも袖とはみつのさ

家に侍けるつゝみ本を亭子院よりかりて

まゐるとてよめる　　躬恒

ことのはと月の桂の枝なるはいなふねつきそらにはつまし

素性法師をめして御屏風の歌よませられ

けるにまゐりたりける時御前にめしておほみき

あまたゝひけるつゐてに給はさりけるたまへ

すとて　　延喜御製

あはとをけるたけいそのかみふるき山へと空やまた見

長治二年三月中殿にて竹不改色といふ

題を講せられけるに御製をとりける

まゝにたまはせてそうし侍ける　　京極関白家肥後

川竹のなかれてきつるとしなみにあまたの[illegible]とそきけ

御返し　　堀河院御製

万代に流絶せぬ河竹によそもすみそ[illegible]

人のためしとそせ侍けるはいかなき付けり

中務

我よりはひさしかるへき跡なれとしのはぬ人はあはれなりけり

世をのかれて後百首乃哥よミ侍りけるにとれる
ふみをかんくく　　貞慶上人
これをこそ誠のみちと思ひしに猶世をわたるはしにそありける
題しらす　　式子内親王
筆の跡に過にし事をとゝめすはしらぬ昔にいかて逢
前大僧正慈鎮
かれも昔たれ人のとかむる花に老乃波をそへてみるれ
花の後人すまゝめりけしもなきてつらき老
百首中に
皇太后宮大夫俊成女
なきさまにみをもそむけて世の人のすみかのまへや
とりせん

兼元のころ内より古今集をかきまいらせて
かきてまつらせけるおくに
前中納言定家
鳥の跡はかなき世にも伝来て末の世まての我跡やのこる
題しらす　　正三位知家
わか道のあとかたりつゝきまてあはれ思はまほしきの跡やなき
前中納言定家新勅撰集えらひ侍りける時
よみ人しらすとて入りけるをつかはすとて
てかきそへける　　浄意法師
いそのかみふるき流の末絶てこゝに我身かこちて遙

京をかへりて侍し折ふし出仕て侍し

藤原為継朝臣

わか為にかしこきみかりの数そへて又やさかえん

為家卿続古乃時八代集作者の位署下傳之

故にてと申侍しを送りつかはすとてかき

そへて侍し　中原師季

いかはかりかきあつめてしるそ家々の集をしらぬ世

蓮生法師りとふりたるみちのさきをかきさらかへる

めつらしく侍る時つかはすとて

平泰時朝臣

くれ竹のよなよなちきりは草はらの露方に波のよすらん

為盛法師てかかへして侍る陣子とある

所よりおこせくきけるにつかはすとて

為家法師

形見とをなにかひの人中に小袖のとおもてにかかる

草華をむしかさみしくよある

丹波經長

かへ玉そのとみえてとまるそのみの草木ぬるへそくき

帝王系圖かき侍とて

中原師光

神代よりつたはる光ふりてくまなるあまてる月の秋そさやけき

撿非違使に侍りける時遇恋のきうりに
まいりて囚をとひくゝのちふとひつきを
けり

中原友景

よろくいつる方にはよるふそとへいてる沖つしら浪

道助法親王家五十首歌に閑中暁

法印覚寛

こゑよそふ新よりかみの夜遠しかきえて宮の灯

暁の心を

前摂政左大臣

むかしの暁やなれてきく秋よるかにと明けて鳥なくらん

土御門院小宰相

暁の鴫のはねかきもゝ我そふとのかすとせし

述懐心を

前大納言忠良

世のうきと今はなにかはしと思ふそ身をさとり果つるかなしみ

正三位成實

一筋に思ふこともなくてにあるはぬ世をなけかれはうし

基俊

あかねさすきを消つと世祈にやそふくもとこそしるかな

俊頼朝臣

いかにせんみこゑに浸りつを見るりかにりまてなよ哉

題しらす　京人

白波のよするなきさを秋の月すゝましきまて
同めしのこゝろふかしとおもひてたのもしきな
なけきをる人のみにつかへけり

梅寮使朝光　于時たゆふ

松山のなかきこなみにおちしかもぬれて袖か

忍し　左近大将済時　于時右大将

忍しとおもふ身なりし松山の末こす波は袖にあまりし

除目のおしあらそひて待たる人のためなに

藤原光俊朝臣

治りしときとしも定まなきをまた今は我身よりそおそれ

述懐歌中に　後京極摂政前太政大臣

世をすてゝやまふかくもあらぬ身はかなしきにたへぬるは世をなのめ

権僧正公経しくめ待をる春日社の不十号

きみに述懐　法印覚寛

うらみてもいまはかひなき身のほとを侘てや桜さく春の庭かな

従三位成氏

身をおもふ心もやゝぬれし川のさ身そしらぬ世の埋木

寄河述懐　藤原伊長卿下

これも身世をへてつゝ果てるものか川文理本のみすやそうらん

述懐歌の中に　雅成親王

世中ハ淵をせとおもへと飛鳥川うきせのふかさみえぬなる

侍従具定

さためなくかはれるハの世中に移さるゝつれなきそ
園城ちるよもそみちるまけれはようゝ待ける

前大僧正澄明

山河の岩流よすゝかに我身ひとりそ若果なき
月をともへてよみ侍ける

基俊

としへて秋なけきさの数りおほく我身老その春そ経る

正三位知家

いかなりし人のうき山の岩ね松独つれなき身のへかゝらん

藤原光俊朝臣

世中はつねにかはりぬ松よりも難面身の秋なりけり
ときこえしかとつましらへなり

前参議信成

今ともふはむ千々命のかきりへてまつかなしき身をしらぬ哉

恋し　よみ人しらす

うしむかしおもひとりし世の命にかなへてやみをもはえん
としのよはひしてけるのち出侍ける歌中に

源有長朝臣
ゆくと秋の小山田におとひきとめし月も引来ぬ
題しらす
八條院高倉
よふかく月のかけともしをれかひとかたや袖もぬれけり
雅成親王
うけかたき身をもとひはゆくへにつけく秋さりの世そ悲しき
述懐の心を
前内大臣 家
うつりゆく月日はかりはかはれとも我身とはなにかはらさりけり
右 左近中将資家
何ことに心を昔をさそふて行と徒に月日くれ

藤原信実朝臣
年ふりてふかきみちをすゝむなりはかなき身をとはてすきにき
法印長恵
そむきてもそむかぬ世とてそれならはいくへにもあはれ身を何にかへまし
中原師季
世中はさてもうき身のかけさそふきのふけふとはしらぬ物から
法印覚海
世中をいとふとやかてかへらぬはあはれなるへき
式乾門院御匣
身をはらねはこの浮世とこそすめ岩ねの中も住みよき

皇太后宮大夫俊成

うき身をは我たにいとへふり捨て山のあなたにいかにやとりもとむらん

今をかきりのやまかくれぬるなにゝ世をひ捨てしこの世にまとはむ

仁和寺二品親王守覚

待すさまてとは遠きになりておくれぬ身なれそとふか

前中納言定家

つねに又いふらさき風ぬて陰ひとのひとの世をいつまてと

前参議雅経年久しくとつてよみ侍る

三ねより歌のかけさきと身まかりて今かさりそのさり給ふ

うきよとかる身待るへき時よりみ侍ける

前太政大臣

なからへて世にふるはあはてと思ひこし身のなれるあはれは今かなしき

述懐歌の中に　前大僧正慈鎮

あさましとひなれるを思ふはなしひ世さてこのかれは身さそなれ

西園寺入道前太政大臣

なかれての川瀬もわかて底さえてすみけるなかをたちわたるかな

前関白左大臣

なくて世を歎きやはする人の身はとかくみえぬ身を恨て

建保二年内裏秋十五首歌合に

僧正行意

今そしるあはれむへしハ小山ての遁家の命ハ光なれとも

建保四年百首歌奉りける時

入道前太政大臣（摂政太政大臣）

よのつねの人より光をたのめとや契り置し身とも思はれん

さふる月待けるころ

前大僧正慈鎮

我身あとゝひくつき世なりせハむかしの道さ家を何ふらん

前大僧正慈鎮遁世の心さしを申けれハ

せつりける　後鳥羽院御製

君なくて山のおくにすまぬ世ハ猶うき世よりのやらん

門弟のゝことをとひてよみ侍ける

前大僧正慈鎮

身のむそよおとこむ行ゑの中に我後世をとひとふらん

悲しらす　後鳥羽院御製

人をおしへしらしめしあちきなく世をとふ心はりのおりふしハ

續後撰和歌集巻第十八

雑歌下

百首歌よませ給ひけるに懐舊の心を

土御門院御製

秋の色をおくりむかへて雲の上になれにし月も物わすれすな

權中納言國信

照月の雲井の影はそれなからありし世をのみ戀渡るかな

順徳院御製

百敷やふるき軒はのしのふにも猶あまりあるむかしなりけり

雨夜老人思といへる心を

大納言隆親

我とする涙を雨もふりにけり思ひの外の昔かたりよ

春日社にたてまつりける十首歌人々によませ給ひける時懐舊

權僧正圓經

いそのかみふるきみ世をそしのふにも我身そとふる世の中そ

世をそむき給ひける時のうしにしるさ付給ひける

惟明親王

おひそめしみちもかはらす鏡かけぬけかとも倚子末た

無品元良親王うしろかけしてのち

仲秋より中つかうしけり

くまてとも雲ゐの秋をなかむるにみえぬ山ちをとはむ宿かな
かねる光りしらるしふかえの山まの
かつらしやまて出けるをとりのかやひまとひ
て秋といふゆへやとうみくにこそ絶けれ

女御厳子女王

我ともおもはぬ山に思ひいりていふりしく草の露けかりけり

大納言師氏女

題しらす

消やすき命は草の露なからかゝる方なきさはうき身なりけり
おもひ知らるゝことゝ絶けるこゝろ

前権僧正澄覚

いつかたに浮世をそむく我なからとはれぬまゝに成りぬめ
出家せんとていくたひかおもひつきにけり

堀川院中宮上総

ゆふくれの闇を晴るかもかゝる世をいとひて雲の空

信生法師

出家の後よみ侍る

そむきぬといふ人ゝもやはり世にすむ心はなほそ住ける

蓮阿法師

題しらす

こゝろにも秋といへはさゝてつらき人の袖をこそしれ

後堀河院御製

雅成親王

秋ても夜はねぬにも夢おもひてくらすなる世をみるそかなしき

継事似夢といふことを

藤原光成朝臣

見るまゝにうつる人の夢と知らは定めなき世をなにか歎かむ

夢と

平政村朝臣

あらなくも枕ならぬと頼むかなおもふ寝の夢は覚元

祝部忠成

はかなさは驚かし夢なりし世中に秋ぬともうつゝとやみん

前参議忠時母

めくりあふ秋月おく待

けふ来権大納言実国のりにつゐしきる

大納言実家

ゆくすゑて聚する月をかなむ老人の夢はほかなすましらん

権大納言実国

ありしなきとおもひしあらぬ夢にかへりそらぬ夢はさめ

皇太后宮大夫俊成女

みし人もなき枕の露の世にあはましの秋はなかれ

八条院高倉

たのむともふかき夢の果てしらぬ雲の中の定

権大僧都実伊

あはれ人のつかぬはかりぬ契ちを定めなき世と結ひてん

西行法師よミける百首哥に
寂蓮法師
白浪の千すゝけよるあ子る波さしてあかぬこの世之おり
見しらず
好忠
波のよるみまれ浦の川せ見え(さゝらに)我やなりなん
よみ人しらず
白浪の千すまいあらひて芦のねなれ世中ハみゆる悲しさ
小町
ありなくて雲と嫁ぬるならハ千すまれ人の命とながら
まうふる月はけらし月見んけり人

ありとみへ月ゆへ思ひつゝよりしとよのく
よみけるハ
在原行平卿
世中にありある人よ思ひそてのあの月をとくみよ
よのなかさとよひくよのとよみける
伊勢
さらあるさ世をとくゆ時の海乃袖乃上なる涙をかれ
和泉式部
なとなるを後てえつる玉のかしぬきとめゝし人の命ハ
赤染衛門
ありなくて空にもふかき雲に煙となる人ぞ悲しき

藤原信実朝臣

なにすに今まてをりつ老の身に又くらん行そ悲しき

ゑ常なきそて　前大僧正慈禅

徒によりなく露と身をなして消えぬる程の命をしかれ

入道親王尊覚

うきなからに行末も身も苔の下とつかの何かしるらんなと思ひしき

年こそ世も草生としるらんと

前大僧正慈鎮

ふりにけるつかのあるしの苔の下にいく世の草の生にけるらん

覚しらす

右衛門督忠家

露のむ秋の夕暮にあはさりし世をよと涙こそ掃ふ

好忠

高瀬にも深の汀にうすおほ下にそあはれ常なき世を

贈僧正公順月輪寺二条禅師也

ふくりまてよ何かしぬ行末におもひけ

ものよみ給へ

定修法師

わすらるゝ涙ありそなからのはまかはりてさらぬ世の

人のなさけより月かへりよそにつけける

法橋顕昭

あはれ秋風のやとの月をそいかに昔と思ひやるらんめ

題しらす　　道命法師

とひきや世にふることしとおもひしに君か形見に花を見んとは

粟田入道関白身まかりて後の春又花を
よ花のちりけるを見てよめる

惟宗行経

桜もおなし宿の梅かさとは思ふに昔の形見人のみにこそ

世中をなけくおもひえけまし

行覚法師

世の中はなにとかまてみる夢のやいつにかはあてならぬ夢

中原行範

ふるさとも葉えはしめのまゝにみよとはかへてかなしき世と

相空法師身まかりにけると西行法師

とふらひ侍りける返事に

寂然法師

見し人の別のほかに露ふかくれる蓮のうへの心そさきと

返し

西行法師

よそに思ふ別のなくは誰となく身なりかはしらすは

式部卿敦固親王身まかりける年の九月つ

こもりにてにはかりけるふみのかくれ中を

ありける　　　よしこ

大方の秋の果たにかなしきにけふはいかてか君くらすらん
清慎公乃母身まかりにける年のさい
とふらひ侍りける九月尽に
貞信公
くれなし月はめくりて出ぬとも新しきを人みぬそかなしき
女御藤原述子かくれ侍りにける後月を御
らんして
天暦御製
露猶もなくて消ぬる白露は人よりさきへてなと
堀三条院はいつくにこもりて中納言資繁
りにつかはしける
権僧正静円
墨染は衣はならねとみむかしの方なき袖は涙なりけり
ちゝの思ひに侍ける時さうならておなし
にまなかたへまつりしける
中納言兼輔
藤衣はらふの袂と見るまてのなみの涙とおなしつゆ
素性法師身まかりて後よみける
躬恒
ねしあひて山への苦家いつくにそ立まされ
大納言済時ともなり侍る女身まかりに
けるをきゝてのちかれおもひまかりち君ともしなき

てなきくもりしこそて侍りけれ

按察使朝光

煙とも雲ともみえぬ程ありあはれとそ人をそ思ふ

延長八年諒闇の年母の服になりける

貫之くりしにつかはしける

中納言兼輔

さきのふこそいはしこそ衣のさかりなれやらん

母の思ひにて侍りける比後鳥羽院の素服たまは

りて

前参議信成

うきはまたさきてこそ衣のまことに袖はかすかなり

藻璧門院の御はての日あまたすきて

民部卿典侍つねよりしをせ侍りける

正三位家衡

こみ様をかりぬ世の露の色は苔の袂とそ思ひやる

返し

後堀川院民部卿典侍

きのふとて色をそれほとめてはかなき我身とそ袖の

なきしよみ侍ける

ひとりまふ母子か袖とうちまきて秋をわかれに露の

入道左大臣身まかりてける妹の思ひに西園

寺にこもりてよみ侍ける

前太政大臣

なき人の形見と思ふに玉くしげ果はあはれなる庭のもみぢ葉

朱雀院かくれ給ひける時後院にてもみぢを
手てよみ侍りける

忠見

とまりゐて人の涙はまよふなれば行ききえもなく君が見えぬ

女御多賀幾子かくれ給ひて安祥寺にて後
のわざし侍りけるに人々のさゝげ物を
たてまつるを見てよみ侍りける

業平朝臣

山のみなうつりてけふにあふことは春の別をとふとなるべし

妻のやまひにおもひみたる女の人にまゐりてすゞと
契りてかへりて月頃ありてなくなりにければよめる

源重之

思ひあまりかたらひおきし人の世をなくてしらるゝ別なりけり

藻壁門院御事の後ほどなくしかるべし
侍りける人のもとへいひつかはして侍るに

後堀河院民部卿典侍

あはれさは浮世のほかもおなじ世にさてもさこそあらめ

後堀河院御はてにまかりける日よめる

平繁茂

見し夢の別にかへる月日とてそを形見之望
後為念仏くれ侍るを聞て後山白川にま
ゐりて思ひつゝけてよみ侍りける

右兵衛督基氏

きのふ乃日をならはし山ところふまとゝ遠き影もさらに忘れさき

道助法親王かくれ侍りにける年の秋道深法
親王又例ならすなり侍りけるを聞き
てよみ侍りける

法眼覚宗

三室山花も昔をしのひて散むけるさきの下葉

後白川院かくれさせ給て後乃始長講堂

よそてむかしをみんく

入道親王兼仁

吹風にみたれしまゝに花散て宮乃梢の苔

父乃墓所にまゐりて

兵部卿有教

梢ぬれんを聞てとを梢まゐりしさは昔ふりにし松の嵐の風

母乃墓所をおかみてまた雅山にかく
心しとてよめる

法眼俊快

きのふまてふしなれしとあらしとをされさせつゝ梢を

父成仲身まかりて後後徳大寺大臣と

ゆひて待らんに　祝部允仲

こえわひあまり越しこの別路の長きさよらひと待わびん
なし　らす　藤原基綱

とりへ山おくりしけふり雲そ猶月日へつゝ形見なりけれ
ちれ秀綾月まりてつゝみの深服にて
とそよめる

藤原秀茂

存夜別し形見とかき捨てかねる袂も涙なりけり
人のなき跡にふるきゝぬをみいてゝ侍る

藤原基政

わすれなむ後思へともいかさりし云れ葉のこそ形見なりけれ

前中納言定家母のおもひに侍けるころ
ひ節とて　殷富門院大輔

常なしぬ世ハうき物とおもひてけふのかなしさを
いまやしるらん

続後撰和歌集巻第十九

羈旅歌

藤原助信かみちのくにへまかりける時御衣給はすとて　天暦御製

唐衣別るゝ人の別には袖よりあまる形見をもみよ

あつまへまかりける人に　中納言兼輔

こひやなむしゆくさきにまちわたるへき我身はさこそ遠

とひに侍りける人につかはしける　藤原高光

旅とゆく草の枕に露けくはをくる人の涙としれ

源公忠朝臣あふみのかみになりてくたりけるに　貫之

別をし定よ待へきわか身ならねはおふさかそとをくなりける

寂昭上人入唐の時つかはしける　性空上人

旅のみちに別てはなる身の行末そ又はあふさ

祭主輔親いせへまかりけるに扇つかはすとて　よみ人しらす

別路の草葉にをくむ露の色もかはらぬ旅の形見にはみよ

とをき所にまかりける人に

小町

露の命はかなき物を朝夕にいきたるかきりあひみてしかな

別の心を　宜秋門院丹後

別ていつをまてとか契るへきゆくもとまるも定めなき世に

雅成親王

つれなくもなからへけふのかなしきは命ならぬの別なりけり

正三位家隆

なからへき命をもたのまぬ別にはまてともえこそ契らさりけれ

藤原教定朝臣

いまとてはおなしのあきは命にまさる別なりけり

修行にまかるとてよみ侍ける

前大僧正行尊

命あらはまたもあひみんたのむとも行かへるへき定めなき世に

老の後いりかとえ安芸群行にくたり侍るに

よそへつかはしける　権僧正永縁

老てこそいとゝ別はかなしけれ又あひみんといふもたのまて

成尋法師入唐の時母のよめる

消かへり露の命はなからへて涙の玉そとゝめかねぬる

おなし時みの母なりけるにつかはしける

よみ人しらす

さひやとのわかれしさと哀いふといふね日そなき

あつまへまかりける人に遣しける

前中納言匡房

別路乃袂にかはす涙川さてや渡の形見ともみん

りのへまかりける人乃なをとゝまりけれは

京極前関白家肥後

あきしほと伊勢立別おもふらし哀むと風のつてにもとへや

やよひのころ人のへまかりける人に

大納言忠家母

春霞たち別ゆく涙こそ行人よりもとめかねけれ

行別といふことを

西行法師

頼まれはおもひし旅の中たえぬとおもひつゝむさやかに涙わかれさと

下野国にはへりける人に

前中納言定家

立そひてそれ行みやこにさて宮の八橋かゝる蛛てを

返し

蓮生法師

思ひやれむかし八橋とそれみかはにはへの衣やまとたん

あつまのくにゝまかりける人に頼めくる庵さ

よしやけふみのうしろ秋まてなとせさり
くれはのもりにつきそやけふりけり

法印耀清

年月はおもふままにも命にてまつこととひなりける

文安百首歌に猿哥

皇太后宮大夫俊成

こゝろ山にすむ猿の木葉をおりしきてころもひは旅人まちしとて（家にて五十首歌に猿）
かしらす

入道二品親王尊助

雲ふかき岩の陰路日数へて都は山のゆくとはかりり

猿の心を

入道前摂政左大臣

立別いまは都のかたはしらねとも白露かゝる雲
ゆふくれは猿の声をきく草葉にさそひそ世のいかにあらん

前右近大将實有

猿の草枕としもやとしいつまてもかくのまらん

雅成親王

十首歌合に猿宿嵐

右近大将公相

嵐吹峯の木の下の草枕うちねの夢は猿にさめけり

猿宿松風

前中納言定家

なかきよの猿の涙やまさりけむ松風さむき里人のやとはかりけん

猿宿夜月　　権中納言雅朝

夜もすからましらの草枕に宿かる月そさやけく

猿声とて　　真昭法師

いて里乃中につきもなくに別さぬ猿ねの嘯乃声

袖せにはましてけれみちそてよみ侍る

菅原孝標女

さ米やるさ猿の声にもかくまたぬ秋を出し在明月

羇中秋といふ事を

藤原長光

露霜の置きまよふ山嵐よ夜すさまし旅の猿人

猿叫月と　　法印覚寛

猿声かつともまよ村時雨聲の音れ山めくりせは

秋云月のはおつまれなへまよりきにさや

乃中山ふかく時雨のしけきはよあ

蓮生法師

かひよひいや宮志ら秋云月志られてこゆはやけ中山

たるしみちふかくよあ

源兼朝

よそにそいくときあれ木枝は侍らふれ山の葉と

寂縁法師

ゆふしほの海にみちてや東路の尾花かりしく宿とさためん

はこねの海をみるとて

鎌倉右大臣

はこねちをわかこえくれはいつの海や沖の小嶋に波のよるみゆ

旅乃心を　後京極摂政前太政大臣

まとしぬ山よりいつるさゝ雲のはたて見て

建暦二年内裏詩哥を合せられ侍りしに

羇中眺望　従二位家隆

あつまちのかたに宿とへはやはゆくへもしらぬ白雲

花の面そかはりける哉

僧正行意

藤しろのみ坂を越てみ渡せは霞もやらぬ吹上の浜

題しらす　前内大臣家

鶏朗た海の浦の橋に離して霧とふる舞ふ人

りのへまうてとて野中のしみつをそて

西行法師

昔みし野中の志みつかはらねは我影をもや思ひ出らん

題不知

よみ人しらす

草枕旅にしあれはいかりこの乱まそていとふにこひぬ日ぞなき

まかりこし袖とたのみてまつ浦にこよひの袋をさすそなり

大納言旅人

さゝえの入江にかゝる芦かれのおかなしなかりはて

長田王

あしきたのゝさかの浦に舟出してみつしまにゆかむ波たつなゆめ

よみ人しらす

難波かた漕出てみれハ神さふるいこまのたけに雲そたなひく

海路をと

前中納言匡房

浪のうへハ屋への塩ちに漕出なは我思ふ人にいそて逢

旅のこゝろを

寂蓮法師

里ハあまのねさるさひしさにうき草のとつきつゝそ床なれつゝ

式子内親王

都人沖つ小嶋の浜ひさし久しくなりぬ波ちへたてゝ

待賢門院堀河

旅ねして秋さり衣さむけきにいつそ吹そむこの山風

登蓮法師

みちこえいそれ松の枝とて志る風もみあしつらん

道助法親王家五十首に海旅

前太政大臣

あま衣たみのゝしまに宿とへハ夕しほみちて鶴そなくなる

さきのおほきおほいまうちきみの吹田の
家に御幸ありし時人々に十首歌
めされしついでに旅

太上天皇

川舟のさしていつくとわかぬ旅とふいそし
宿とさためん

續後撰和歌集巻第二十

賀歌

宝治二年さきのおほきおほいまうちきみの
西園寺の家に御幸ありて久しき世を祝と
ふりにし代々の御ためしの御幸[行]なりけるとて
よみうたてまつりける

前太政大臣

けふまてもつかへきにける代々の跡をそふかきこゝろにさきたちなむ[なん]

御返し

太上天皇

しるきかな昔も今やゆるすらんこの代々の跡なるしるしは

今上はしめて鳥羽殿に朝覲行幸ありける時
さらにいつくへて御遊御拝の儀ものは
うりみそてまつりてとひつけ侍ける

前太政大臣

あつしからき我身よりいつに年をけてか御幸
鳥羽殿にはしめてまうてさせ給ひて池の松
といふ事を講せられし時席にあそてま
侍りて

いはひをくいつしかときゝしと松かえの千年ならはたちかはる池の
はなへし

太上天皇

けふこそは松にも千世のかけみえて君か御幸の神の宮の池水

大納言典侍

色かへぬ松のけふこそかりとも八千世にすめる池の
百年をまつりし時崩松

お太政大臣

君か代は子の日にふ枝さし年高きことしの松の緑なる
亭子院にて御ふ松ましくけり時
見ることしは正月なかの子の日にあたりてこそし
てさきのいの院の御方よりたてまつて世給ふ
とそうきつけさせ給ひける

延喜御製

二葉よりけふをまつとやおもひけむ千世をかさねて今をみな
子日のみこと

村上天皇

いさけふは小松か原に子日して千代のためしを我よりひかまし
是は内にて十首哥めされし時のく
に祝

きてみれは千世もへぬへし高濱の松にむすへる露の白玉

建永元年八月十五夜鳥羽殿にて当季
よそにてはみそてはやそひぬとありけん月の
夜和哥所の秋のことゝもまいりけるよし
きこしめしてて哥を給ひけり

後鳥羽院御製

いにしへもかゝるためしや月の影をあふく秋にあひけむ

今上くらゐにつかせ給ひて太政大臣によろこひそうし給ける日牛車ゆるされて
その比西園寺に花を見て

前太政大臣

ちりそめぬ老木に残る花桜君にしられて色もかはらむ

寛喜元年女御入内屏風に

入道前摂政太政大臣

我君乃千世のはしめにさく花ものとけき風の枝をならさし

鳥羽院くらゐにおはしましける時内裏

にて花を見んとてよみ侍ける

富家入道関白太政大臣

なさけありてのとけき風のきみならこのへの句ふもおなより

応保元年三月中殿にて花契多春と

いふことを講せしめけり

大納言俊明

君か代にちきれる花も春まてにつきせぬ松の限なきされ

永長元年三月おなしく花契千年を

いふことを序たてまつりて

前中納言匡房

いくねたにおなし桜も君か千年の春のめくらめ八

天暦七年十月ころきさいの宮乃御方より

きくらへ侍をたまひける日人々おのこともに

流しまつりけるに

天暦御製

かはらしな菊の色かな千世まてもあかぬ色とそ

おなしき十三日庚申秋女蔵人御前

よ菊乃花をまゐりけるにみくらの上達部

まゐりはべりて袖をすこしおほひ
はべりしをほせける時いましめ侍りて
さぶらひける菊をとりてよみ侍りける

大納言重光

時雨まも霜にもかれぬ菊のもなかれにたるよはにてこそ見れ

延喜十七年十月菊の宴の日はかさしと
つかうまつりし侍りける

三条右大臣 干時右大将

むかしためしなく秋まで白菊の千年と君ぞさかえん

寛保三年大井川に行幸日内よりめ
しはべりけるに

弁乳母

いつもそのいろなる白菊の盛よりゆきちて菊の花ぞしらずよる人ぞしる

見えわたる瀧のまかや若菊の花盛とそらの数よめらん

祭主輔親

ゆふつけの久しき友とかねてよき山のにきをとりて

堀川院に百首歌たてまつりける時祝歌

権大納言公實

君か代の数によそへてはなかなかしら菊の瀧はまもりてありと
月次の屏風の絵にとよみ侍りける

元輔

千年ふる松といへともうへてみる人そかそへてしるへき

右近大将定国四十賀の屏風に

素性法師

うへて見る松と竹とは君か代に千年ゆつるものとをしる

延長比時女一宮のりさ給ひけるによみ侍りて

してこしてつゝみすとて裳にかきつけ

かめにされけるによみてたてまつりける

躬恒

さゝれいせて白玉になるまて君かよはいく万代や経ん

貞元二年秋左衛門督によまれけるかう

に庚申の夜人々まいりてあそひける次に

よみ侍ける

源順

昔より色もかはらぬ門竹の君をそかねてへつらん

嘉保三年十月大井川に行幸侍ける時

ふてまいりて

右衛門右大臣

大井川常よりもことにみゆる哉君かみゆきをまちてそゝ

建仁二年鳥羽殿にて池上松風といふ

ことをよましめて講せられけるに

源具親朝臣

君かためにけふ松風よ千年とうつる庭の池の
祝の心を　鎌倉右大臣
ちはやふるいつの御山の玉椿やをよろつ代も色はかはらし
題しらす　藤原為相朝臣
くもりなく光さやけき秋の月万代迄の鏡なるへし
寄月祝といふ事を
後京極摂政前太政大臣
和歌の浦風ふきかへる波のうへにくもりなき世の月をみるかな
月毎秋友といふ事を講せし侍し時
左衛門督通成

いく秋をかさねぬるよの月かけは万代かけて契るなれ
九月十三夜十首歌合に名所月
祝部成茂
神もみよくもりなき世の鏡山みかきあけたる月そさやけき
建仁三年和歌所にて釈阿に九十賀給は
せける時志ろかねのつゑのかしらにかき
つくへき歌めされけり
大蔵卿有家
百とせの道ゆくさかにつきそめてとる末もしられぬ千代そこゆへき
み杖を給はせしはまそへし給けり

皇太后宮大夫俊成

この杖はわかみかはにそ汲我君か八百万代乃峯にあかれり

天仁元年大嘗会悠紀の御屏風にかんかうさ
山

前中納言匡房

浅緑みかさの山に雲分すゝむや千年乃かしめすらん
かたんさ山

よろつよを君か御代にそみかみ山のとまれる月も影をみえけり

仁治三年悠紀風俗哥三神山

前参議経長

いくちよのみかさてりそめまし三神の山にはつそしも

時はしき主基乃風俗乃み乃石清

前中納言經光

末遠き千世にそ久しきたる二葉より岩清乃松

寛元四年主基風俗哥神山

正三位成實

神山の日影のかつらかさしてふきすみのあかりそまれて年ふる

おなし御屏風に菊坂山

菊のふちは乃山にさく菊の千世にかはらは
君かためなりけり